
ISV ~ RED&BLUE外伝 ~

甘楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISV〜RED&B L U E外伝〜

【Nコード】

N0846V

【作者名】

甘楽

【あらすじ】

現在執筆中の小説、「ISV〜RED&B L U E〜」の外伝集です。

基本的にネタだらけですが、過去編のみは本編に沿った内容になっています。

思いついた時に投稿しますが、本編のほうもよろしく願います。

第9話IF編 セシリアVS本気紅也（前書き）

はい、第一話です。

第九話、VSセシリアのIF編です。

紅也がチート＋凶暴化してます。

第9話IF編 セシリアVS本気紅也

「フル・スキン全身装甲とは…珍しい機体を使いますのね。」

「そうか？俺の所属してる所じゃ、むしろメジャーなんだが。」

オルコットは、既に空にいた。その目は、相変わらずこちらを見下したようであるが、しっかりと俺の目を見据えている。

「…改めて聞け。お前の相手は、誰だ？」

「決まっていますわ。今の私の敵は、目の前にいるアナタ——山代紅也だけですわ！」

「ふっふっふ……」

その言葉に、俺は笑って返す。

「な…何がおかしいんですの!？」

「今の俺は、タダの山代紅也じゃない…。そう、さしずめ…本気紅也だ!!!」

「…はあ。」

あきれた様子のオルコット。だが、果たしてその余裕が、いつまで続くのか…。

「本編では出せなかった、この俺様の本気…テメエに見せてやるぜえ!!!」

「ちよっ、アナタ、口調が…」

「試合、開始!!!」

「ヴォワチュール・リュミエール…起動!!」

言うが早いか、レッドフレームは残像を生み出し、高速移動を始める!

セシリアはレーザーライフル、『スターライトMk.?’』を構えるも、こちらを捉えきれない。

…さて、読者の皆様も薄々気付いたはず。今の紅也の機体は、本編未出の『レッドフレーム改』である。現時点ではまだ開発されていないこの機体だが、このEF編ではチート待遇である。

「くっ…行きなさい、ブルー・ティアーズ!!」

セシリアはビットを展開。倍以上に増えた砲口が、レッドフレームをつけ狙う。しかし、レッドフレームは止まらない。体をひねり、左右に動き、時には回転し、軽々とレーザーを避けていく。

—と、状況に変化が起こる。唐突に加速が止まり、レッドフレームの背部ユニット、タクティカルアームズ?Kが変形したのだ。

そう、逆三角形のデルタフォームから、大きく上部が開いた形へと

「チャンスですわ!!」

ビットに光がたまり、レッドフレームを砕かんとレーザーを臨界させるも…。

「マガノイクタチ、起動！！」

光が消え、ブルー・ティアーズからエネルギーが放出される。…レッドフレームが、ブルー・ティアーズのエネルギーを吸い出したのだ。

「そ…そんなことが…」

「おっと、呆けてるヒマはないぜ！！」

タクティカルアームズが分離し、変形する。2つに割れた剣のような形の、中央部に銃口が見える。それは、まるで…

「タクティカルアームズ？K、アローフォーム！！コイツを喰らいな！！」

寄るな、触るな、くたばれ、阿呆！！」

声に合わせて一発、二発、三発、四発。光の矢が放たれ、曲がり、空中に浮かぶ4機のビットを破壊する。

「ビームの曲射！？わたくしでも、まだできませんのに…。」

「ボケてる場合か、阿呆！！」

スキだらけのブルー・ティアーズに、レッドフレームが襲いかかる。その手に握られたタクティカル・アームズは、いつの間にか巨大な剣へと姿を変えていた。

下から上へ、振り上げる。とっさに構えたスターライトMk.？は、あっさりと両断された。しかし…セシリアは不敵に笑う。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ!!」

腰部のアーマーが外れ、レッドフレームへと向かう。まさに必中の距離。紅也は急上昇して回避を試みるも、ビットは直角軌道で追尾し——レッドフレームの姿は、爆炎に吞まれた。

しかし。

「甘えよ、クソ虫!!」

レッドフレーム、健在。その手には、二振りの日本刀が握られている。

右手にあるはガーベラ・ストレート。彼の師匠が作りし愛刀。左に構えるはタイガー・ピアス。師の元師匠が鍛えし宝刀。

ビームをも切り裂くその刃は、あっさりとブルー・ティアーズを引き裂いたのだ。

これでセシリアは、全てのビットを失った。

再び迫るレッドフレーム。セシリアも、近接武装を展開しようとするも…

「遅え、双破斬!!」

二本の刀で切り上げ、後、たたき落とす。絶対防御が発動し、ブルー・ティアーズのエネルギーは大幅に削られた。

「きゃああああ!!」

体制の立て直しを図るセシリア。しかし、全ては既に遅く。
眼前には、赤き大剣が迫っていた。

このタクティカルアームズ？Kは、レッドフレームから遠隔操作で
きるようになってる。

最後の二機のブルー・ティアーズが発射されたとき、紅也は剣に搭
載されたスラスターで急上昇した。その後剣から手を離し、二本の
刀を抜いたのだった。その剣は、紅也の後ろから接近しており、双
破斬を放った直後にブルー・ティアーズを追撃したのだ。

——直撃。地面に叩きつけられるセシリア。そして、ブルー・テ
ィアーズは光となって消滅する。

「散々偉そうにしておいて、このザマかよ、クソ虫が。
…偉い奴が強いんじゃない、強い奴が偉いんだ。分かったか、阿
呆。」

その言葉を聞いて、セシリアは意識を失った……。

record!

・セシリア1分撃破

・セシリアノーダメージ撃破

第9話IF編 セシリアVS本気紅也（後書き）

IF編は、本編が進んだらまた書きます。

本編の次話は、本日20時に投稿です。では、またそちらで会いましょう。

第40〜42話IF編 ラウラVS本気兄妹（前書き）

…と、いうわけでIF編です。

予告より早い投稿ですが……まあ、いいですかね？

第40〜42話IF編 ラウラVS本気兄妹

一回戦第一試合。その対戦カードは……。

ラウラ・ボーデヴィツヒ&篠ノ之箒VS山代紅也&山代葵

「残念だったな、一夏が相手じゃなくてよ。」

「ふん。貴様を倒せば同じことだ。」

「だから、私たちを倒すなんて、無理に決まってんじゃない。
どうしても倒したかったら……そうね、自慢の部隊を率いて、全員
でかかってきたら？」

「……たとえ勝ち目がなくても、勝ちに行かせてもらう！」

全員に気合いが入る。会場の空気は既に、戦場のそれであった。

「覚悟しろ、山代紅也！そして、山代葵！」

ラウラのその言葉に対し、彼らは……

「「ふっふっふ……」」

不敵に笑う。

「な、何だ！？何がおかしい？」

突然のことで動揺するラウラ。それほどまでに、彼らの雰囲気は異

質であつた。

「山代紅也?」「山代葵?」

「ちがうな(わ)」

「俺は――」

「私は――」

「本氣紅也だ(葵よ)!!」

バーン!!

背景に、爆発が見えた。

「な……何を言っている!？」

「またか!? またなのか!？」

ラウラは本気でワケが分からないといった表情をして。
箒は、前回の悪夢を思い出して震え始めた。

そんなこんなで。

試合が、始まる。

「早速行くぜ! マガノイクタチ!!」

紅也のレッドフレーム改の背部バックパック、タクティカルアームズ? Kが変形、V字の形になる。大きく開いたV字の先端が箒に向

けられると。

バリバリバリバリ!!

「なっ!?! エネルギーが!?!」

箒の打鉄は、そのエネルギーを大きく減らされ、慌てて後退する。

——そう。背中に装着されたマガノイクタチが、エネルギーを吸い取ったのだ。

「ふう。満腹だぜ。」

吸い取られたエネルギーは、レッドフレーム改のエネルギーとなる。彼のエネルギーは、既に天元突破しているようだ。

「何をしている! 邪魔だ!」

箒の後ろから、ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンが出現。6本のワイヤーブレードを駆使して、紅也を箒からひきはがし、レールカノンで狙いをつける。

——別に、紅也一人でも対処は容易なのだが、これはチーム戦。

ガガガガガガ!

上空から、ガトリングが斉射される。それに気付いたラウラは、左手を伸ばし、AICを発動させる。降りそそぐガトリング弾の半分は、確かに停止した。しかし——

「くっ!?!」

残りの半分、緑色の閃光は、停止せずにラウラに襲いかかった。ラウラは、その襲撃者を見やる。そこにいたのは、いつものブルーフレームではない。

本来のブルーフレームより、一回り大きい頭部。背中には、紅也と類似した、しかし形態の異なる青い翼。脚部には大型のナイフシースがあり、そこには二本のアーチャーナイダーが収まっている。肩には、大型の追加スラスタ。これにより、本来のブルーフレームとは桁違いの運動性能を獲得している。

——そう。この機体は、本編未登場の『ブルーフレームセカンドリバイ』であった。

今は、バックパック『タクティカルアームズ?』のガトリングアームを分離し、右手に握っている。そこからは、今も二色の弾丸が吐き出され続けていた。

そう。ビームと実弾、二色の弾丸を。

「ホラホラ、動きが止まってるわよ?」

「くっ……黙れ!!」

レールカノンを、今度はブルーフレームへと発射する。弾丸はブルーフレームの胴体へと直撃し、爆炎が上がる。

「ははは!大したことはないな!」

……しかし、煙の中から現れたのは、傷一つないブルーフレームだった。

トランスフェイズ装甲。

装甲表面に着弾の衝撃があると、装甲下のPS材に通電し、強度を増す装甲だ。

PS装甲と異なり、フェイズシフトダウンを気付かれない、消費エネルギーを抑えられるといった利点がある。

ブルーフレームセカンドリバイは、これを装甲の一部に採用しているのだ。

——いかにレールカノンといえど、TP装甲にはダメージを与えられない。

「私からも言わせてもらっわ。『大したことはないな!』」

この時点でラウラが詰んでるような気がするが、気にはしていない。

両肩と背中中のバーニアが、一気に火を噴く。通常の3倍の瞬時加速。瞬きする間にブルーフレームが迫る。その腕には、二本の片刃剣、タクティカルアームズ・ソードアームが装着されている。これは、タクティカルアームズ?の変形の一つであり、合体して大型剣として振るうことも、分離して振ることも可能な武器だ。

「死になさい。」

放たれる斬撃は左右1つずつ。レールカノンと、翼の一部がはじけ飛ぶ。

さらに、加速に押され、ラウラのESは大きく体勢を崩した。

ワイヤーブレードの制御が乱れ、レッドフレームを逃がしてしまう。

「おのれ!」

今度はそのワイヤーを、ブルーフレームへと向けるが――

「あら、何それ。攻撃？」

「？何を言って……んなつ！？」

そう。ワイヤーブレードの先端が、無くなっていたのだ。

しかもワイヤーを斬ったのではない。ブレード部分が、きれいに両断されていた。

「……あいつか！！」

視界の隅で、紅也が右手の刀を見せつけるかのように振っていた。その足下には、6つのブレードの先端が転がっている。……つまり、ラウラは、最初から遊ばれていたのだ。

――が、それ以上に遊ばれていたのが、箒であった。

今も果敢に刀を振るも、紅也はそちらを見ずに、左手の刀一本で相手をしている。

「くっ、このっ！」

「葵ー。箒はどうするー？」

「……どっちでもいいわ。」

「じゃ、落とすか。」

ヴォワチュール・リュミエールを起動。勢いのまま箒を蹴り飛ばし、アローフォームで一射。ビーム矢は箒の腹部に命中し、シールドエネルギーを奪い去る。

――篠ノ之箒、戦闘不能。

これで2対1。プランD——所謂ピンチだ。

そもそも、ラウラの武装はプラズマ手刀のみ。これでは、二人同時に戦うことはできない。

「ねえ。質問いいかしら？」

「何のっ！つもりだっ！」

二刀VS二刀。ラウラの表情に余裕はないが、ブルーフレームはまだまだ余力を残している。

「私と紅也、どっちに倒されたい？」

「！ふざけるなああ！！！」

ラウラが葵を睨む。すると、ブルーフレームの動きが停止した。AICを使ったのだ。

「これで終わりだ！」

勝利を確信するラウラ。ブルーフレームの胴体を斬りつけたが、実体ダメージは無い。

ならば、と今度は腕を狙う。

ラウラは気付いていた。あの装甲は、胴体にしか無いと——！！

その洞察は正解。ただ一つ残念だったのは、葵がわざわざAICにかかった理由を考えなかったことか。

ズガガガガ！

再びガトリングが、シュヴァルツェア・レーゲンを襲う。

「な！？ 何故だ！ あれは、貴様が捨てたはず——」

……が、モニターに映った映像を見て驚愕する。

ガトリングアームが自立飛行をし、ラウラの背に向けて射撃を行っていたのだ。

「自立兵器……だったのか……。」

——シュヴァルツェア・レーゲン、沈黙。

これで決着がついた……かに思えたが。

「あああああああつ！！！」

ラウラの機体に紫電が走る。ドロドロに溶けたシュヴァルツェア・レーゲンはラウラを包み、その体を再構成する。そう、VTシステムが発動したのだ。

現れたのは、漆黒の戦乙女。織斑千冬のコピーが、二人の前に立ちふさがった。

「……ま、本編では二人で戦ったけど。」

「……紅也にあげる。」

「さんきゅ。」

青い機体が下がり、赤い機体が前へと出る。手にしたのはタクティカルアームズ・ソードフォーム。

エネルギーは奪わない。せつかくだから、普通に戦ってみたいとい

う、紅也の思いの表われだった。

二人が動く。

太刀と大剣が激突する。

雪片からエネルギー刃が飛び出し、そのまま剣を両断するかに見えた。

が、対ビームコーティングを施されたタクティカルアームズに、そんなものは通じない。

エネルギー刃をかき消し、刀本体を両断し、一瞬で敵を無力化する。

「さーて、お仕置きの時間だ。」

剣の先が、二つに分かれる。

タクティカルアームズ・ワークフォーム。

本来は資材の切断に使われるそれだが、武器としての性能も極めて高い。

「どうする？このまま切るか、それとも射るか。」

黒いISが、逃れるためにもかく。が、この武装に、IS程度では対抗できない。せめて、パワーシリンダーでも搭載していれば、状況が違ったかもしれないが……。

ぎりぎりぎり。

締め付けを強くしていく。装甲にヒビが入り、ISから力が抜けていく。

「ハッハア！命乞いってヤツをやってみろよ！

最後は何だ？ママか？恋人か？それとも織斑先生かあ？今頃走馬灯見て、生まれる前からやり直してる最中かあ？」

実際には、こうなる前に走馬灯みたいなものを見ていたのだが、そんなことは誰も知らない。

バリ……

ISの表面が割れ、隙間からラウラの姿が見える。それを確認した紅也は、ISを地面に投げ捨てた。

「フン……。ガーベラを使うまでもない。」

叩きつけられたISは、ひびが全身に広がっていき、ゆっくりと光へ変わっていく。

「まだまだ暴れ足りないけど……。まあ、楽しかったわ。次は、もっと強い相手だといいわね。」

「たしかに弱過ぎたな。…どうする？今から俺達で殺し合うか？」

「次があつて……。たまるかー！」

地上から二人を見ていた篤は、物騒な会話を続ける二人に、そんなつつこみを入れていたのだった……。

第40～42話IF編 ラウラVS本気兄妹（後書き）

ネタ色の強い話でした。

次は……後継機編かな？いつになるかはわかりませんが。

後継機編 その1（前書き）

はい、また投稿します。

本編11話の後の、ネタ時空にて。

白式とよく似た名前の、あの機体が登場します。

後継機編 その1

本編11話の後。

「なあ、一夏。お前、そんな機体で大丈夫か？」

「そんな機体って…。白式のことか？確かに、装備が雪片一本ってのはキツイけど、千冬姉もこれで世界一になったからなあ。」

「ステイシスやアンサングは、誰が使ってもランク1になれる機体じゃないぞ。お前は、織斑先生じゃないんだ。」

「最初の例えは良く分かんないけど、俺じゃ、雪片は使いこなせないってことか？」

ややむすつとした一夏。俺、山代紅也は、そんな一夏にある提案をする。

「そうじゃないさ。ただ、こう言いたいんだ。

——別の機体、動かしてみる気はないか？」

side：織斑一夏

「と、いうわけで、これがお前の新・専用機だ！」

「早っ！！」

某月某日。場所は第二アリーナ。山代、箒、セシリア、俺を集めた

紅也、布に包まれた機体を持ってきた。

「さあ、カバーを取ってくれ！そして、その目に焼き付けるがいい！！」

言われたとおりに布を引っ張る。すると…

——そこに、『金』が、いた。

金。金ぴか。豪華絢爛な、金色。眩しいほどの純金を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが……」

「ああ！白式の後継機、『百式』だ！」

金ぴかのそれ。無機質なそれは、なぜか俺以外の誰かを待っているように見えた。

「…百式？」

「ああ。白に一を足して百。安直だけど、いい感じだろ。」

「…かなり派手だな。」

上からセシリア、紅也、箒だ。山代は無言。名前の由来には納得したが……なぜだろう。素直に納得できない自分がいる。

「とりあえず、装着してみてくれ。おっと、試作機だから、初期化すんなよ。」

「わかった。やってみるよ。」

百式に背中を預ける。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺

の体に合わせて装甲が閉じた。
かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして、機体から『何か』が流れ込んでくる。

『認めたくない……な。若さゆえの……ちという……』

『当ら……ければ、どうということは……』

『見……る！私にも……が見える！』

『アポ……、ロベ……ト、行くぞ！』

『ま……だ！まだ終わらんよ！……』

「——か、——ちか、——夏——！」

「はっ！？ 箒、俺は……」

急に現実に戻される。……さっきのは、何だったんだ？

「さ……さあ？ コアネットワークが電波を拾った、とか？」

紅也が、眼をそらしながら答える。……正直、滅茶苦茶怪しい。

「……正常。百式、起動を確認。」

「やっぱり、全身装甲ですね。」

山代とセシリアの興味は、既に百式に移ったようだ。もう少し心配してくれよ。

「じゃあ、まずは武装を展開してみよう！一夏、武装一覧を表示してみてくれ。」

紅也の指示に従い、俺は武装リストを展開する。…おお、白式と違って、たくさんあるな。

「まずは近接武装だ。呼び出してくれ。」

「おっしゃあ！来い、ビームサーベル！！」

手の中に現れたのは、金色の短い棒。…アレ、失敗？

「…ビームサーベルは、イメージが大事。思い浮かべて。」

どうやら、これでいいらしい。山代の言葉に従い、イメージする。

——何をイメージしよう？

そうだ、やはり刀がいい。決して朽ちず、折れず、敗北しない。そう、千冬姉の雪片のように。今、ここに、あの刀があれば——

ブーン！！

先程まで握っていた棒から、刃が飛び出す。それは、俺にとってなじみのある形だった。

「…やはり、雪片になったか。一夏め、白式への執着が強すぎるぞ。」

おい紅也。聞こえてるぞ。そんなに俺を、コイツに乗せたいのか。

「ビームですって！？イギリスでも、レーザーが精一杯なのに…」
セシリアもセシリアで落胆している。なんだ、ビームってそんなにすごいのか？

「…次、ビームライフル。」
「ビームライフルですってええええ！？」
「セシリア、うるさいぞ。」

外野がうるさい。集中できないだろ。
再び名前を言つて、武器を召喚。今度は銃か。

「じゃあ、ターゲットを出すから、それを狙って打ってみろ。」

紅也が8になにやら入力すると、アリーナに3つの立体映像が浮か
び上がる。

。にアームが二本、砲台が一つくつついたような形の何か。これが
ターゲットか？

一発目、外れ。二発目、外れ。三発目、外れ。ああくそ、当らねえ。

「やはり、一夏さんは射撃が得意ではありませんのね。」
「機体がブレオンだから、しょうがないだろう。これから慣れれば
いいさ。」

四発目、命中。五発目、外れ。六発目、外れ…

「止め。次、クレイバズーカ。」

ISサイズのバズーカが展開される。ターゲットは再び三機。

「また射撃か？一夏には向いてないのではないか？」

「なっ…舐めるなよ、箒！！このぐらい、俺だって…」

今まで以上に集中し、的を狙う。…ロックオン。

発射された弾頭は、命中寸前で破裂し、散弾となつて的を破壊した。

「お、早いな、一夏。もうモノにするとは。」

二機目、三機目も破壊する。命中率100%。

…すげえな、セシリアは。こんなものを、動く的に当ててんのか。

「じゃあ、最後のお楽しみ…メガバズーカランチャーを使え！！」

やたらと紅也のテンションが高い件。

言われたとおりに出してみると…百式の二倍はあるであろう、超長
ライフルが出現した。

「なんという…大きさだ…」

「あんなものが…あるなんて…」

「…大艦巨砲。」

「いや…漢おとこのロマンだ！！」

四者四様の反応。かくいう俺も、かなりの感動を覚えていた。

「よし、じゃあ、ターゲットを撃墜だ！！狙え、一夏！」

アリーナのバリアの天井付近に、何かが映し出される。

ハイパーセンサーで拡大。見覚えのある形…って、白式じゃねえか！

「コラ、紅也！ターゲットの変更を要請する。」

「了解した。…っと、コレでどうだ？」

再び拡大。青い機体色、背部の四枚のフィン・アーマー。コイツほどではないが、大きなライフル――

「わたくしのブルー・ティアーズではありませんのぉお！？紅也さん、ターゲットを…」

ズキュウウウウウン！！！！

「おし、命中。」

「やるではないか、一夏。」

「一夏さあん！？」

セシリア、絶叫。

「いや、だってよ。この間戦ったばかりだから、つい、反射的に…な？」

「『な？』じゃありませんわよ！うう…一夏さんなんて……知りませんわあ！！」

涙を流し、走り去るセシリア。それを紅也が呼びとめ、何やら耳打ちする。

…何だ？なにか、良くないことが起こりそうだ。

「最終段階、戦闘試験。」

「ふふん、どこからでもかかってきなさいな、一夏さん。」

アリーナで向かい合うのは俺とセシリア。…どうしてこうなった！？
元凶だと思われる紅也は、ニヤニヤしながらこちらを見ている。箒
は…あ、目をそらした。

「ルールはこの間と同じ。始め。」

山代が、唐突に開始を告げる。するとセシリアが距離を取り、四機のブルー・ティアーズを放つ。

——急に、頭が痛くなった。

『vガンダムは伊達じゃない!!』

『シャア!!』

『行け、フィン・ファンネル!!』

様々なシーンが、脳裏をよぎる。その中の一つ、飛び回る白いピットが、現在の景色と重なって……

『…アムロ!!』

——俺の意識は暗転した。

——報告。

試作型IS、百式について。
全武装性能、規定値をクリア。十分に実戦に耐えうるものである。
特に、ハイパーメガランチャーの精度、威力には目を見張るものがある。

しかし…戦闘支援プログラム、「C・A・チップ」に欠陥あり。相手が特定の武装を使用した際、操縦者の意識を乗っ取り、暴走する危険あり。今後、さらなる改良が望まれる。

改良案として、C・A・チップに代わる支援プログラムと、背部への砲戦型バックパックの装備を提案する。

オーストラリア国営企業モルゲンレーテ所属

山代 紅也

「うつ…わたくしは、オチ担当なのですか…？」

「……ドゥマイ。」

続く？

後継機編 その1（後書き）

…「白式」と「百式」って、似てるよね？

そんな話でした。

後継機編 その2（前書き）

遅れましたが、投稿です。

予告通りの後継機編。アレが、進化して帰ってくる――！

後継機編 その2

学年別トーナメントが終わって数日。いきなり「私の嫁」宣言を受けた俺は、毎日のようにラウラに付きまとわれていた。今の所は背弄拳の応用でのりくらりと逃げ続けてるけど……。いつまで通じるか、はつきりいって分らない。

そんなある日。珍しく普通に（そう、待ち伏せなどせず、普通に、だ！）ラウラが部屋を訪ねてきた。普段と違うその様子に、何かを感じとった俺と葵は、いつものように無碍には扱わず、部屋に招き入れ、話を聞くのであった……。

「……で、何なんだ？話つてのは。」

「うむ。頼みがあるのだが……。私に、ISを貸してくれないだろうか？」

「……はああああつ！？」

常識とか遠慮とかそういったものを一切抜きにしたラウラの言葉に、俺達は珍しく叫び声を上げてしまった。

「な……一体、なんでそんなことを？」

「……事情説明。」

「いいだろう。実はだな……」

回想中……

『シユヴァルツェア・ハーゼ所属、ラウラ・ボーデヴィツヒです。本日はどのようなご用件でしょうか？』

ある日、IS学園の私の部屋に、予期せぬ訪問があった。

事前の連絡も無しに、私を訪ねてきたその男は——ドイツ軍の制服を纏っていた。

『君がボーデヴィツヒ隊長か。話には聞いていたが、その若さで隊長とは、大したものだ。』

…ああ、自己紹介がまだだったな。私はドイツ軍作戦本部所属、オットー・アイヒマン大佐だ。』

『はっ、大佐殿でありましたか。失礼しました！』

『はは、楽にしてい。とりあえず、座りたまえ。』

本来、上官の前で自分だけ座るなど言語道断であるが、命令であれば仕方がない。私は自分のベッドに腰掛ける。すると、それを確認するようにこちらを見た大佐は、私の向かいにあった、シャルロットのベッドに腰かけた。

——そして大佐は、ゆっくりと口を開く。

『学園での生活はどうかね？』

『……は？』

私は、一瞬何を聞かれたのか分からなかった。

なにせ、大佐だ。私にとっては、雲の上の存在に等しい上官だ。

それが、なぜ、たかが一特殊部隊の隊長の生活を、気にするのだろうか？

そんな疑問が表情に出てしまったのか。私から不信感を読み取った

大佐は、次の言葉を発した。

『ああ、別に他意はない。ただ、軍人として純粹培養されてきた君が、普通に高校生活を送っているのが心配だね。』

『そ、そうでありましたか……。：普通の生活、というのがどういうものかは分かりませんが、大きな問題も無く、過ごしているつもりであります。』

『それは何よりだ。』

で、次の質問だが……。周囲の人間とうまくコミュニケーションはとれているか？あんなことがあったんだ。多少のトラブルもあっただろう。』

——あんなこと

つい先日起こった、VTシステムの事件だ。

あの時、私の心の弱さが原因で、嫁や、一夏や、シャルロットたちを危険な目に合わせてしまった。だが、彼らは私を受け入れ、仲間として扱ってくれている。

——それは、きっと、とても幸せなことなのだろう。

『——大丈夫です。この皆は、私を受け入れてくれました。かつて、彼女らを“拒絶”した私を……。だから——で、ですから、問題ありません。』

失敗した。

今の態度は、間違いなく上官に接する態度ではなかった。

——が、大佐殿の反応は違った。

『はっはっは。なるほど、ずいぶん丸くなったものだ。クラリツサの言つとおりだな。』

どうやら、君をここへ派遣した判断は、間違っていなかったらし

い。』

そう言つて、本当に嬉しそうに笑みを浮かべる。
その表情を見て、思わず私は――

『ありがとうございます、大佐殿。』

笑顔を浮かべ、そう答えたのであつた……。

回想終了

「うう……グスッ……ええ話や。」

「……何故、関西弁？」

「だって、大佐……男だ！漢だよ！！」

さすが、ガウで特攻しただけのことはあるな。」

「大佐殿は特攻などしていないが。」

それはさておき。

「……で、それが何で『ISを貸す』つていう話になるんだ？」

「ああ、それは……」

回想・続き……

『それで、確認したいことがあるのだが。』

『？ 何でしょうか？』

『予定では、ここ数週間は大きな行事はない、ということだが……。本当かね。』

『はい、間違いありませんが……。』

『そうか。それは良かった。』

大佐は、まだ笑顔を浮かべている。

先程までとなんら変わりのない表情なのだが、私は、それにどこか不吉なものを感じた。

——そして、その予感は、すぐに現実のものとなった。

『——では、君の専用機、シュヴァルツェア・レーゲンを、しばらく預からせてもらう。』

『……は？』

最初とはまったく違う驚きで、私は言葉を失った。

和やかな会話が続けていた中での、突然の不意打ちだった。

『……な……何故……？』

かろうじて絞り出したのは、そんな一言。

が、それに対する返答は、至極あっさりとしたものだった。

『VTシステムによる、ISへの影響を調べなければならない。なあに、ほんの一週間ほど預かるだけだ。没収などではないから、安心なさい。』

『そ、そうでしたか……。それは』

良かった。

そう言おうとして、思わず言葉に詰まる。

——それは、ある約束を思い出したためだ。

台無しになってしまった、学年別トーナメント。そして、一夏の決着。

一夏と和解はしたものの、決着はつけたい。そう思ったラウラは、一夏に再戦を申し込んだのだ。

それも——教官の立会いのもとに。

その際、こう言われた。

『なお、私が立ち会うのは今回だけだ。再戦は認めん。いいな？』

再戦の日時は5日後。

それ以外の日では、教官に自分の力を見せることはできない。そんな日に、自分のISがないなど……

『どうした、ボーデヴィツヒ隊長？』

『……！はっ！何でもありません！……！』

『？ ならばいいのだが……。では、ISを。』

『う……大佐殿。その……もう少し待ってもらうことは……？』

『生憎だが、これは既に決定事項だ。私の一存で変更はできんよ。』
『~~~~~！了解しましたっ！！』

今度こそ回想終了……

「これが、昨日の話だ。」

「ああ、だから昨日は襲撃が無かったんだな。」

「…納得。」

「で？何で俺に頼みに来たんだ？」

「ああ。このことをシャルロットに相談したら、嫁に聞いてみるように言われたのだ。」

「何でも、前に一夏にISを貸したことがあったと聞いたんだが。」

「ああ……。後継機編・その1の話か。」

「そういうことなら……。手はある。」

「…いいぜ。ちょうど、稼働試験を頼まれてたやつが一機あったんだ。それを貸すぜ。」

「！いいのか？」

「ああ。試合当日を、楽しみにしてるよ……。」

「恩にきるぞ、紅也！礼として、今夜は一緒に……。」

「…出てけ。」

side：織斑 一夏

一週間前、ラウラに再戦を挑まれた。

なんでも、千冬姉の立会いの下で、正式に決着をつけたいらしい。

この間、あの空間で話をして、ラウラと俺とのわだかまりは溶けた。だから、今度の試合は恨みによるものではなく、「けじめ」をつけるための戦い。それを受けないなんて、男がすたるってもんだ！

で、今日は試合当日。なんだけど……

「……遅えな、ラウラの奴。」

先に白式をまとってアリーナに出たのは良かったものの、ラウラはまだ準備中みたいだ。

……何でも、ISが本国で整備中だから、代わりの機体で戦うとか。万全の状態じゃなければ、再戦の意味がないと思うんだけど……。そんなに千冬姉に見てもらいたかったのか、ラウラ。

「——待たせたな。」

オープンチャネルによる通信。発信源は知らないコアだが、声からして、間違いなくラウラ——

……知らないコア？

そこに引っかかりを覚え、俺は相手をチェックする。

すると、白式から情報が送られてくる。「コアナンバー・100」と……。

……訂正。知ってるコアだ。

何となくオチが読めたから、覚悟をしてゲートに視線を向けると……
…『奴』は、勢いよく飛び出てきた。

「待たせたな、一夏。再戦を始めるぞ。」

——何度見ても眩しい、金色の全身装甲。

右手に持つ銃は大型化し、さらに破壊力を増したように見える。

気になるのは、肩から生えた二門の砲塔。左肩のは普通だが、右肩のはどう考えてもガトリング砲だ。

最後に、左肩に書かれたマーク……。前回、俺が使ったときには『百』と書かれていたそれは、『百改』と新たに書き直されていた。

ここまできたら、嫌でも気付く。

この機体は、前に紅也が持ってきた『白式の後継機』、百式の改良型であると……。

戦闘が始まる。

「まずは小手調べだ。…喰らえ！」

先制の一撃は、ラウラのものだった。

左肩にマウントされた、パルスレーザー砲を発射。威力こそシュヴアルツェア・レーゲンのレールカノンブリッツに劣るも、弾速はそれをはるかに上回る。

そんな一撃を、一夏は——余裕のある動きでかわした。

「甘いな！銃口を見てれば、飛び道具の発射方向なんてすぐ分かる

「……って、紅也が言ってた。」

「ふつ。それもそうだな。だが、それは銃口が一つだけの場合だ。」

今度は右肩のガトリング砲から、光の粒が降りそそぐ。

——そう、光だ。

一夏の予想通り、これはガトリング砲であった。

しかし、誤算があるとすればただ一つ。ここから発射された弾丸は、鉄塊ではなくビームだったという点だ。

「——ちっ！紅也が用意した機体だ！そのくらい、予想しとくべきだったか!？」

武器の向きには十分注意していたつもりだったが、いかんせん弾速が速すぎた。最初の数発が白式の肩に命中し、その装甲に穴をあける。が、そのころには既に白式は加速し、ビームのシャワーから抜け出していた。

「くっ……やるではないか！私は嬉しいぞ!!」

「そりやどう……もっ!」

会話をしながらも、一夏は自身に迫る火線から逃げ回る。しかし、回避した先にラウラがパルスレーザーを撃ちこむため、一切の油断が出来ない状況だった。

（くそっ……。元の機体は万能機だったけど、こいつは砲戦特化かよ!）

まずい——と、一夏は思う。

ここは完全に敵の間合い。対して白式は、接近戦しかできない。

しかも、かつてあの機体を使った一夏には分かる。
あの機体に、雪片式型と同レベルの格闘戦武装、ビームサーベルが
搭載されていることが。

「これすら避けるか！ならば、火線を増やすぞ！」

ラウラはとうとう、ビームライフルまで持ちだしてきた。これで合
計3つの凶悪兵器が、一夏に狙いを定めたことになる。

——が、一夏の顔に浮かんしたのは、絶望などではなかった。

（来たっ！！）

一夏は気付いていた。あれだけの火力が、長続きするわけがないこ
とに。

前に、紅也がビームサーベルを使わず、日本刀を振る理由を尋ねた
とき、こう言っていた。

『ビーム兵器は恐ろしく燃費が悪い』……と。

その問題を解決するために作られたのが、この間シャルロットが使
ったような『カードリッジ式』のビームらしいけど、まだ未完成ら
しい。現に、この前のマグナムは試合中に壊れたしな。

そして、あの3つの武器は、カードリッジ式などではない。
このままいけば、いずれ火線を維持できなくなり、砲撃は薄くなる
だろう。

——その時が、唯一のチャンスだ。

「くっ……墜ちろ！」

ラウラの顔に、焦りの表情が浮かぶ。

いまや一夏は攻撃も防御も捨て、回避に専念していた。そして避けきれないときは、一番威力の低いパルスレーザーに突っ込む。

——そして、試合は急展開を迎える。

何度目か分からない、ビームライフルによる射撃。銃口に注目していると、そこが一瞬チカッ……と光り、すぐに消えたのだ。

「なっ！！！」

——エネルギー、エンプティーだ。

待ちに待ったチャンス。一夏は雪片を実体化し、そこにエネルギーを流し込んでいく。

——零落白夜、発動。

一夏は調子確かめるかのように左手を握り、開き、そして再び雪片式型を掴む。

そして瞬時加速。一気にエネルギーが減っていくが、どうせ最後の攻撃だ。そんなものは気にしない。

「くっ……。」

正面で、ラウラがビームサーベルを引きぬく。

——でもな、ラウラ。その武器は、エネルギーがなきゃ使えないんだぜ？

光の剣となった雪片を振りかぶる。狙うは一撃必殺。頭から股下までを両断するつもりで、一気に振り抜く！

この試合での勝敗を分けたのは、機体を熟知していたかどうか。幸運にも、俺はあの機体を知っていた。そしてラウラは、機体に慣れる時間が不十分だった。俺達二人の差なんか、それだけだ。

「——遺言はそれだけか？」
「……へ？」

——気がついたら、俺のシールドエネルギーはゼロになっていた。目の前にはラウラの姿は無く、雪片の光も消えていた。そして、慌てて後ろを見ると、そこにはピンクの光剣を振り抜いた姿勢で静止する、ラウラの姿が。

「な……なんで……？」

おかしい。

ラウラにはもう、エネルギーは残ってなかったはずだ。だからこそ一夏は賭けに出た。唯一の勝機、接近戦に全てを賭けたのだ。

「こつこつことだ。」

そう言ってラウラはビームライフルに持ち替え、さっきと同じように銃口を光らせる。そしてもう一度ライフルを構えると、今度はし

つかりとビームが発射された。

——つまり、ラウラはビームの出力を最小にした状態で発射し、エネルギー切れを装ったのだ。

そして勘違いした一夏は、ロンドよろしくラウラに接近戦を挑み、敗北したのだ……。

——報告。

試作型IS、百式改について。

肩への追加装備により、火力の大幅な上昇に成功。圧倒的な弾幕によって敵の動きを完封し、一方的な戦闘を展開した。唯一の弱点は燃費の悪さであるが、これは『カードリッジ式』の導入によって改善可能である。

しかし、3基の射撃装備を同時に扱うのは困難であり、操縦者には一定以上の技量が求められることとなった。一刻も早く、戦闘支援AIを完成させることが必須である。

ただ、本機は当初の『高機動のビーム搭載機』というコンセプトを若干逸脱しており、元となった『百式』には、まだ発展の余地があると考えられる。

オーストラリア国営企業モルゲンレーテ所属

山代 紅也

後継機編 その2（後書き）

えー、一応言っておきますけど、これもまたIF展開の一つです。
本編の合間の出来事ではありませんので、あしからず。

後継機編は、しばらくお休みです。次の「あの機体」を出すためには、本編である機体を開発することが必須条件なので……。

過去編その1 セシリアVS葵 ジン評価試験（前書き）

久しぶりの番外編です。

今回は「過去編」の名の通り、本編で実際に起こった出来事を書きました。

本編2話と8話に存在する、葵の髪型の矛盾。その理由も説明されます。

過去編その1 セシリアVS葵 ジン評価試験

——これは、まだ世界にビーム兵器がなかった頃のお話…。

N・G・I 1017 ジン。N・G・Iが、モルゲンレーテの技術提供の元に作った試作型全身装甲ISのうちの一機である。今回、そのテストパイロットとして選ばれた少女。名をアオイ・ヤマシロといった。そして、

「アオイ。一人でイギリスに行くなんて、ホントに大丈夫か？やっぱり、俺がついていこうか？」

「心配ない。コウヤ、レッドフレームの最適化中。ここにいて。」

彼女を心配そうに見つめる少年は、彼女の双子の兄、コウヤ・ヤマシロであった。二人はまさに瓜二つであり、アオイが髪を切ったら、見た目は完全に一致するだろう。

「でも、あのN・G・Iが作った試作機。コンセプトもウチとは全然違うんだ。気をつけないと…」

「しつこい。…私は、大丈夫。」

「う…アオイ…」

二言で兄を黙らせた少女は、そのまま飛行機に乗り込む。

……が、過保護な兄は、この程度で引き下がるはずは無かった——。

飛行機は、イギリスに到着する。

出迎えなどない。なぜならここは、既に敵地。

——アオイの目的。それは、ジンの性能試験……つまり、戦力評価であつた。

イギリスの試作ISと模擬戦を行い、その改良点を見つけ出す。

…とは言われているものの、その実態は、研究者たちのエゴだろう。自分たちの作った機体が、どの程度の完成度なのか…。それを知りたいのだ。

モルゲンレーテとしても、N・G・Iの技術力を知りたいのだろう。ここに、二社の思惑が一致した。

そこで白羽の矢が立ったのは、BT試験兵器の実験を行っているイギリスであつた。

互いに試作機を持つ立場。性能評価を持ちかけたら、あっさり話がついた。

……本音としては、相手より自分の技術が上だ、と見せつけたいだけなのだが。

ちなみに、アオイがテストパイロットに選ばれた理由は一つ。

今回のテストを担当する、イギリス側の代表候補生が、アオイと同じ年だからだ。

——そこまで対抗意識をみせなくても、いいだろうに。やれやれ。

これを引き受けるにあたり、アオイは条件を出した。

ひとつ。ジンの各種装備一式を、モルゲンレーテに譲渡すること。

ふたつ。性能評価を行うジンを、改造する許可を出すこと。

二つ目に関しては、正しい評価ができないとしてN・G・Iが渋ったが、「このままでは負ける」と断言したアオイの一言で、泣く泣く条件を呑んだ。

——そして、今。

俺、コウヤ・ヤマシロは、改造されたジンを台車に乗せて運んでいる。

……え、オーストラリアに残ったんじゃないかって？

アオイが心配なんだよ！幸い、俺の機体、レッドフレーム（正式名称はメイン・バトル・フィギュアだが……）は、使用可能な状態だ。

そこで、脚だけ部分展開し、その上から立体映像を重ねて投影することで、「がっしりした大人の職員」のフリをしてヘリに乗り込んだのだ。

と、モルゲンレーテのロゴ入りトラックを発見。

担当者に書類を渡し、ジンとともにそのまま乗りこむ。

——こちらスネーク。潜入ミッション、成功だ。

イギリス、IS開発局。

ここが、今回の試験の会場だ。

研究所とアリーナが同じ敷地内にあり、データを取るにもISを改良するにも便利な構造をしている。

俺は、アオイが使うピットにジンを運び込み、ようやく元の姿に戻った。

これ以上続けたら、帰りに使うエネルギーが足りなくなる。

それに、たとえ誰かに見つかっても、アオイのフリをすれば大丈夫だ。

…さて、模擬戦の開始まで、あと一時間。少し、敷地内を偵察——いや、そう、散歩だ。散歩しよう。

自分にそう言い訳し、俺はピットを後にする。

ああ、そうそう。ジンの設定は、アオイ以外にはいじれないようにロックした。妨害なんてさせねえよ。

なんとなく足音を消しながら、廊下を歩く。

それと同時にレッドのセンサーで、アオイの位置も探る。万が一にも、鉢合わせしてはいけない。説教二時間コースは確定だ。

…うん、この辺にはいない。まずは、研究所の方へ向かったようだ。センサー解除。警戒レベルを引き下げて、再び施設をまわる。

そして、休憩室に向かったとき——俺は、ついに見つかった。

「もしもし、そのあなた。どなたですか？ 見覚えのない方ですが……」

声からして、女性。ここの職員だろうか？

前髪を下ろし、目元を隠す。顔はやや伏せて、振りかえる。

——そこに、お嬢様がいた。

…いや、だつてなあ。

金髪縦ロールなんて、どう見てもお嬢様だろ。

しゃべり方も、どこか気品がある感じ。なんていうか、こつ…。貴族っぽい？

「あの、もしもし？」

ああ、今度は少し、不信感がこもった声だ。…やばい、早くしないと。

「……………何？」

……………やばい！今、モロに地声だった！！修正修正——。

「まあ！質問しているのはこちらですわ！何者ですのー！」

「……………モルゲンレーテ所属。アオイ・ヤマシロ。」

「ヤマシロ……………？ああ、わたくしの対戦相手の！」

ええっ！？コイツ、よりもよって試合の相手かよ！

こりゃヤバい。余計なことを話したら、正体バレるかも…………。

「光栄に思ってくださいな！このわたくしと、テストとはいえ戦えるなど、あなたの身に余る栄誉ですよ！！」

「……………知らない。興味ない。」

ああもう、話しかけるな。俺は面倒が嫌いなんだ！

「まあ、何でしょう！その態度は…」

「雑魚と話す時間は無い。」

一方的にそう言い捨て、俺は撤収する。

「なっ……！！いいでしょう！このわたくしが、自ら、叩きのめして差し上げますわ！！」

そんな捨てセリフを聞きながら、俺は休憩室から逃げ出した……。

そして、試合開始時刻。

俺は、モニターの映像をハックし、離れたところから試合を見ることにした。

イギリスのISは、既に準備完了して、空に浮かんでいる。

海のような青い装甲を持つIS。その手には身の丈よりも大きなライフルが握られ、背中には四枚の大きな青い翼がついている。

——アレの名称は、ブルー・ティアーズ試作型。

自立稼働し、レーザーを放つ大型砲台だそうだ。…ビットってのは、小型が相場と決まっているが。あんなにデカければ、アオイにとってはただの的だな。

反対側のゲートが開く。

そこから出てきたのは、青と黒の二色に塗り分けられた、全身装甲のIS——ジンだった。

背中には本来の二枚の翼の他に、二つのプロペラントタンクが搭載されている。ここにはジェット燃料が満載されており、機体の速度を一時的に引き上げることができるのだ。

また、装甲のところどころには穴が開いており、徹底した軽量化がなされている。

——そう、アオイは、鎧武者のような外見のジンに、速度重視のチューンを施したのだ。

本来の武装である剣は外され、軽量だが切れ味バツグンのナイフ、アーマーシュナイダーが二本、肩にマウントされている。

足にはスラスターが増設され、全てのスラスターを稼働すれば、本来のジンの3倍近い速度が出せる。その分、操縦のクセが強くなるが……アオイならば問題ない。

手に握られたのは、無反動砲キャットウス。弾頭は通常弾頭と閃光弾の二種類。一撃離脱を前提としている装備だな。

さらに、頭部のトサカは撤去され、代わりにモノアイが追加された。正面と上部を別々に観測するモノアイは、どこか不気味だ。

「……来ましたわね！アオイ・ヤマシロ！！」

「……………」

敵は騒ぐが、アオイはどこ吹く風。元々無口な奴だ。

「宣言通り……あなたが地を這い降伏するまで、徹底的に叩きのめして差し上げますわ！」

そんなこと言ってたっけ？『叩きのめす』だけだった気がするけど。

「……うるさい。雑魚に興味は無い。」

俺と似たようなセリフを発するアオイ。それを聞いた相手は、口をパクパクさせている。

《それでは、テストを始めて下さい。》

無機質な声が、戦いの開始を告げる。

「~~~~！！行きなさい、ブルー・ティアーズ！！」

青いビットが、宙を舞う。

一機はアオイの後方へ。一機は真上へ。三機目はその退路を塞ぐ位置へ。四機目は、アオイの周囲を円軌道で飛び回る。

が、唐突に。

アオイの姿がかき消える。

イグニッションブースト

瞬時加速。それも、超高速の。

ライフルを構え、ビットの操作に集中していたお嬢様（仮）は、その接近に虚をつかれ——否、知覚できずに——ナイフで突かれ、腹を蹴られ、とどめとばかりに放たれたキャットウスを直撃する。

——シールドエネルギー、減少。残り、137。

いきなり大ダメージだ。こりゃ、決まったか？

「くっ……やりますわね！……ならば！」

お嬢様はビットを呼び戻す。それらはISのそばに滞空すると、一斉に光を放ち始めた。

ビットを固定砲台として利用した、圧倒的な弾幕。それらが、葵の接近を阻む。

「…小癩。」

キャットウスの弾頭を変更。無誘導で放たれたそれを、レーザーが撃ち落とす。

瞬間、圧倒的な光が立ち上り、アリーナを包み込んだ。

「なっ！？卑怯ですわ！これでは、視界が…」

…でも、それはあなたも同じはずですわ！」

確かに。

今の状態じゃ、アオイも敵の姿は見えない。

——だが。

アオイなら、記憶を頼りに敵を落とすくらい、簡単にできる。

ボン！ボン！ボン！

聞こえたのは、爆発音のみ。そして光が収まると……

「…あら？」

そこに四機のビットは無く、残されたのはライフルを構えた青いISのみであった。

そしてその正面に立っているのは、武装を全て格納した状態のジン。

「ふふふ…どうやら！ビットを破壊しても、このスターライトMk・
？を破壊するほどの弾丸は、持っていなかったようですね！！実
弾で身を固めるから、弾切れになるのですわ！」

そう言つて高笑いを始めるお嬢様。そして――

「喰らいなさい！！」

無防備なアオイに、ライフルを向けた。

エネルギーが凝縮し、レーザーとしてあふれようとする。それを見
たアオイは、人差し指を相手に向け――

「…お前は既に、死んでいる。」

と、なんとも有名なセリフを放つ。
すると。

何の前触れもなく、突然。ライフルが爆発した。

「え…。スターライトから光が逆流する……！きゃあああああ！
！！」

そのダメージで、シールドエネルギーを失った敵ISは、地上へと
墜落していった。

模擬戦は終了。俺は、再び変装し、悟られることなく帰国した。
アオイも、敵操縦者と話すことなく撤収し、ヘリの中で眠ってしまった。

…疲れたのか？いや、時差ボケかな。

後曰。

あの時の映像が届いたため、俺はようやく、その試合について話すことができるようになった。

早速「最後に何をしたか」と聞いてみると、「余裕があつたから、ライフルの銃口に爆弾を詰めておいた」との事。

——アオイには勝てない。

俺は、改めてそれを実感した……………。

過去編その1 セシリアVS葵 ジン評価試験（後書き）

この後、紅也是大きな事件の当事者となります。その出来事があまりに過酷だったため、セシリアとの出会いは覚えてません。

でも、ブルー・ティアーズのことは覚えてる。さすが技術者（笑）。

セシリアの最後のアレは、完全にネタです。

次回は…まだ未定です。

過去編その2 ビーム強奪事件（前書き）

久しぶりの投稿です。

エイミーさんが登場したので、あの事件の顛末をば……。

本編未登場のあの人も出ますよ！

過去編その2 ビーム強奪事件

——ジンのトライアルから半年後。

あの後、葵がチューンしたジンは研究のためにN・G・Iに接收され、葵自身もテストパイロットを解任された。

そこで葵はモルゲンレーテに再び異動し、メイン・バトル・フィギユアのテストパイロットに任命された。

そして、二ヶ月前……。

忘れもしない、あの大事件が起こった。

——N・G・Iとモルゲンレーテの、協力関係の破棄。

多くの技術者は引き抜かれ、技術のほとんどは手に入れられず……。モルゲンレーテは、設立以来初めての大敗北を喫したのであった……。

「元々は遥かなる大宇宙を探索するために作られたマルチフォーム・スーツである、インフィニット・ストラトス。白騎士事件をきっかけに世界中に広まったそれは、当初こそ本来の用途で研究されていました。が、やがてIS開発を巡る状況は一変しました。」

ラジオ越しに、そんな演説が聞こえてくる。

「宇宙開発のために開発していた初期のIS、通称 type-0 を狙ったテロ事件。多くの宇宙開発関係者を巻き込んだその事件を契機に、ISは宇宙から遠ざかっていきました……。」

フリーウェイを疾走する車の窓からは、冬化粧を始めたカリフォルニアの街並みが見える。

これで空が見えたら最高なんだけどな……。あいにく、厚い雲が空への道を閉ざしている。

「……しかし、それは結果として更なるIS開発を促し、今日に至るまでの発展の礎となったと言えるでしょう。」

車がフリーウェイを下りる。制限速度の上限が下がるが、気にせず今の速度をキープ。

幸い、道に雪は積もっておらず、こんな車でもスリップせずに済んでいる。

「あの未曾有のテロから10年……。我らアメリカのIS開発は、転換期を迎えました。」

……そう、新たな第三世代機の開発に成功したのです！」

やがて、基地の入り口が見えてくる。

頑丈そうなゲートの前には、銃を持った警備員が二人。

車が彼らに近づくと、彼らは手に持つ銃を下げ、ゲートを開く。

「この事件で犠牲となった彼ら、彼女らに対し、冥福を祈りましょう。マリア・キッドマン、クラウス・E・ヒエムロス、ロバーク・スタッド、クロウ・スタンピード、ニコラス……。」

警備員が敬礼し、車が入っていく。

しかし、車は定められた駐車場へは向かわず、敷地の奥……IS研究所へと向かっていく。

「では、紹介しましょう！ノース・グランダー・インダストリーが開発した、最新鋭の全身装甲型IS……デュエルの登場です！」

目的地に到着した。

ラジオを切り、コートを着込む。

後部座席に乗せてあった8を掴み、車を降りる。

瞬間。

冷たい冬の乾いた風が、俺の頬を撫でつけた。

「寒うううう！！」

並大抵のことじゃ動じない自信のあった俺だが、この寒さには驚いた。

こりゃ……ドイツより寒いんじゃないか？

「ホラ、しゃきつとしなさい！男の子でしょ？」

運転席に座っていた女が、俺の尻を蹴り飛ばす。しかもつま先で。その乱暴な動作に、叫び声を上げそうになるのを必死にこらえ、やや涙目になりながら振り返る。

「痛ってえな！何すんだよ、母さん！」

「そんだけ元気がありや大丈夫ね。…じゃ、さっさと装着しなさい。」

「はいはい。」

8を握る手に、思わず力がこもる。

…実験では何度かやってるけど、実際に使うのは今日が初めてだ。集中し、いつもの感覚を思い出す。あの、体内に、違った何かが生じる感覚を……。

そして。

8が、消失する。

「……成功、ね。」

「よし。第一段階はクリアだね。」

体を感じていた寒さが消失する。

同時に視界がクリアになり、自身の感覚が増幅したような、奇妙な錯覚に襲われる。

「じゃ、入るわよ。コウヤは平気だろうけど、私はかなり寒いんだから。」

「…どの口が言うか！どの口が！」

入り口のカードスロットにカードキーを通し、暗証番号を入力する。すると赤いランプが緑色に変化し、錠が開いたことを示した。

「失礼しまーす……。」

なーんて、冗談めかして入るも、返事はない。

……そりゃあそうだろう。今ここにいるはずの警備員は、ほとんどが別の基地にいるのだから。

そう——デュエルの発表式典の警備に。

さて、そろそろ状況を整理してみようか。

俺の名前はコウヤ・ヤマシロ。オーストラリアの企業、モルゲンレーテに所属する技術者だった男だ。

——そう。だったのだ。

今の俺は、モルゲンレーテが開発したメイン・バトル・フィギュアのテストパイロット。そう、戦う技術者だ。……なんてな。

さて、ここで重要なのは、俺が男であるという点だ。

メイン・バトル・フィギュア、通称MBFは、モルゲンレーテが開発した第二世代のISだ。しかしISは、女でしか起動できない。ならば、何故俺がテストパイロットなのか？

……答えは簡単。俺のMBF、レッドフレームは、ISじゃないのだ。

コアを持たず、エネルギー源はバッテリー。量子変換や操縦者の生体コントロール以外の機能はほぼ使えない、ISの劣化版。それが、今の俺の機体だ。

そんな俺が、何故オーストラリアを飛び出し、アメリカにいるのか？

それはズバリ……ドロボウするためである。

二ヶ月前にN・G・Iとモルゲンレーテが提携を解消してから、モルゲンレーテはN・G・Iに多くのスパイを送り込み続けた。そう——彼らの技術を奪うために。

そのほとんどは捕えられ、その後の行方は分らない。だが、それでも数人——警備員や技術者として、N・G・Iにもぐりこむことに成功したのだ。

そんな『潜在的スパイ』のうち一人が、ある情報をキャッチした。

——デュエルの発表式典のとき、基地が無防備になると。

それを利用し、モルゲンレーテはビーム兵器の強奪を決行することにした。

今までは、Xナンバーと呼ばれるN・G・Iの新型……デュエルを警戒し、作戦を行うことは出来なかった。でも今日はそのデュエルもない。そして、ISのいない基地など……張り子の基地も同然だ！

「とはいえ、警備は十分多いんだけどね……。」
「そりゃそうよ。ここ、GAT計画の最先端の研究所だもの。」

とりあえずロッカールームに潜入し、工員から渡された制服に着替えた俺達は、正面切って堂々と廊下を歩いている。

こういう場合、下手にキョドったりコソコソすると、逆に怪しまれるのだ。

もちろん、ダンボールは論外。一度やってはみたかったけど……またの機会に使用しよう（つまらんシャレだな、我ながら。）

「……で、母さん。とりあえず、口調を直してくんない？その姿で女言葉は、さすがに怪しいというか……。」

「あら、ごめんなさい。…こんなでいいか？」

「何故俺の口調をチョイスしたのかは分からないけど、まあ、さつきよりは……。」

今回、潜入メンバーとして動くのは、スパイを除けば俺と母さんの二人だけ。

しかし母さんは、二度のモンド・グロツソ出場によって完全に顔が割れている。そこで、今は男装して潜入してもらっているのだ。

元々そこまで大きくない胸はサラシで隠し、男物の作業服を着て、名前の由来にもなった長い青髪は、栗色に染めたうえで縛って三つ編みにしてある。

……まあ、要約すると、デュオのコスプレみたいになってた。

廊下を歩く、歩く、歩く……。

しばらくするとセキュリティレベルの高い扉に閉ざされた、閉鎖区画の入り口にたどり着いた。

「ここだな……。ベニ、8でロックを解除して。」

「ベニって何だよ、デュオもどき。」

一度8を分離して、カードスロットと連結させ、暗号解析を始める。様々な文字列が浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返し、パスワードの解読が進む。

「あなたの名前……ユウヤさんの故郷では、漢字で『紅也』って書くんですって。その『紅』っていう字は、『べに』とも読めるらしいの。」

「ふうん……だから『ベニ』ね。…ま、気にいったかな。」

ちらちらと通路をうかがいながら、解読を進める。

パスワードは残り一桁。これなら、すぐにでも扉が——ほら、開いた。

「じゃあ行くよ、デュオ。」

「ハハハハハ！時よ止まれ、ザ・ワールド!!」

「いや……その『DUO』じゃねえし。」

さて、問題はここからだ……。

最初の警備兵に遭遇。……銃を持っていた。

いくら8を装備してるとは言っても、レッドフレームの装甲を展開してない俺では、あんなものは防げない。

そして母さんもISを持っていない。たとえ内部からの手引きがあったとしても、この基地にISを持ち込むことはできないからだ。

だからこそ、俺が選ばれた。人以上IS未満の装備を持つ、この俺が。

警備員は、俺達をちらり、と見ただけで通り過ぎる。…どうやら怪しまれずに済んだようだ。

しかし、心臓に悪い。

一歩間違えれば殺される……。これが現実なのだと、否が応でも思
い知らされる。

「なーに弱気になってんだよ。お父さんならこのくらい、笑い飛ばして進むぜ？」

……ああ、あのときのユウヤさん、カッコ良かったわ。」

「いや……こんな所でノロケられても……。何か吐き気が。」

いつそのこと休憩室に忍び込んで、特濃ブラックコーヒーでも飲んでこようか。

そんなことを考えられるくらいには、俺にも余裕が出てきた。

「……お、分かれ道だな。」

「…そう、だね……。」

研究室の突き当たりに位置する、二つの分かれ道。
たしかここが分岐点。

右なら格納庫……うまくいけば新型のデータを手に入れられるも、
発見されたら命は無い。

左なら武器開発区画……ビーム兵器があるのはこっちのはずだ。

「じゃあ、俺は左に行くよ。母さんは手筈通り、陽動をお願いします。
す。」

……死なないでよ。俺はともかく、アオイが寂しがる。」

「安心しなさい、私を誰だと思ってるの？最強無敵のお母さん、ヒ
メ・ヤマシロよ。」

そう言い残し、母さんは右の通路へと足を進める。俺は左へ。
後ろは振り返らない。

……きつと、母さんは大丈夫だから。

8が持つ機能の一つ、立体映像の投影を使い、自分の姿を大人に変える。

半年前はレッドフレームを部分展開しないと使えなかったそれは、
今や8を持っているだけで使えるように進化していた。まあ、手を
離れたらおしまいだから、念には念をと8を装着してるんだけどな。

外見は、実際にこの区画に勤めている研究員の一人に。背格好も似
ていたので、まあ丁度良かった。

しかもその本人は、今頃西海岸のコンテナの中で絶賛昼寝中。後ろ
から本人登場！なんてドツキリは起こりえない。

なので俺は、だいぶ余裕を持って研究室にたどり着くことができた。
周囲ではISのプログラムを組んでいたり（あれは……可変機か？）
、巨大砲塔を作っていたり（なんか、男のロマン砲とか言ってる。）
、巨大な実体剣にビーム発信機を取り付けるための議論をしていた
（新型のビームサーベルか？）。

「だーから！これをつければ、ここからビームが発射できるだろ
？まさか、剣からビームが飛んでくるとは思わないだろうよ！」

「バツカ、お前……。ここは普通にビームサーベル用の発信機をつけて、ビーム・実体二つの特性を持たせる方がいいだろうが！」
「いや……操縦者の方で設定をいじって、両方の用途で使えるようにするのはどうだ？」

「「それだ！」」

「よし、早速プログラムを組むぞ！」

「じゃあ俺は、シュゲルトゲベルそのものの設計を見直そう。」

「決まりだな！俺は、このプランを上申してくるぜ。」

ビーム発信機に取り付いていた三人の技術者は、一瞬にして走り去ってしまった。

残りの技術者は、こちらを見てもいない。ただただ、自分たちの研究に没頭している。

——チャンスだ。

ビーム発信機に触れる。すると、俺の中に様々な情報が流れ込み、これの特性を理解しようとする。

実はレッドフレームには、相手の武器を奪い、解析し、アンロックするという規格外のプログラムが積んである。その分、容量は大きい。別に今回の任務に多くの武器はいらない。ビーム発信機の一つや二つ、余裕でインストールできる。

時間にして30秒くらいか。目の前の装置は消失し、レッドフレームの拡張領域に収納された。

これで、俺の任務は終了。

ややあっさりと終わったことに安堵しながらも、俺は研究室を後にするのだった……。

side：ヒメ・ヤマシロ

「……何だ、拍子抜けしちゃうわね。」

格納庫にいたのは、12、3人の男性技術者のみ。IS操縦者は一人もいなかった。

これはラッキー！……と思ったけど、あいにく新型らしき影は一つも無し。そこにあつた3機のISは、すべて旧型のジンだけだった。

「……ま、暴れるには十分ね。」

ゴキッ、ゴキッと肩を鳴らす。

そしてその場でストレッチ。屈伸、伸脚、上体起こし……と、矢継ぎ早に行い、体を温める。

「おい……何をやってるんだ？」

その様子を見とがめられたのか、作業員の一人が無防備に私に近づいてくる。

……バカね。怪しい人物がいたら、まず発砲すべきでしょうが。それでもつて動けなくしてから正体を探る。少なくとも、私はそうやってるわよ？

……苦情が来たから止めたけど。

男はなおも私に近づく。その表情は、私を怪しんでいるものではなく……むしろ、私の頭を心配してるような表情だった。

——正直、不愉快です。だから……

「凶がれ」

ドゴス！！

強烈な延髄蹴りを放つ。

それだけで男は、声もあげずに倒れ伏した。

……なのに、何故か他の作業員は私に気付き、慌ただしく動き始める。

武器を取りに戻る者。私に接近する者。外部と連絡を取ろうとする者……。

まあ、関係ない。
全部潰すだけだ。

殴る。蹴る。飛んで、踏みつける。

私が手足を動かすたびに、人がバタバタ倒れていく。

気分は三国無双。この爽快感がたまらない。

「ばあああくねっ！ゴツド・フィンガアアアアア！」

連絡を取ろうとしていた作業員をアイアンクローで締め付け、そのままコンソールに叩きつける。手加減したから、死んではいないだろう。

——これで、残りはあと一人。

「う、動くな！撃つぞ！！」

向こうで拳銃構えて震えてる、バカー一人だけだ。

「ねえ知ってる？『撃つぞ』って言う人は、たいてい撃つ気がないんだよ。」

「うるさい！撃つぞ、この豆しば！」

「カッチーン！いいわ、ぬるぬる動いてあげる！ホラ、撃ってみなさいよ！」

「く、くそう！俺に撃たせやがって！！」

パン！

三下つぽいセリフと共に、銃弾が放たれる。

……的外れの方に飛んでいくかと思ったら、案外いい狙いね。このままだったら右腕辺りに直撃するんじゃないかしら。

でも、黙ってやられる訳にはいかない。私は腕をスツと動かし、銃弾が通り過ぎた直後に元に位置に戻す。

「ば……馬鹿な。銃弾がすり抜けただと……？」

「あら、あなたにはそう見えたの？トロいわね。じゃあ……」

——次は、こっちの番よ。

近くにあったコンピュータを両手でつかみ、持ち上げる。

繋がっていたコード類はすべて力任せに引きちぎり、刺さっていた整備兵は振り払い、頭の高さまでリフトアップ。

「な……化け物……。」

「化け物……？」

何よ、こんなかよい乙女（心は常に20歳）に向かって、その言い草は。

失礼しちゃうわね、ホントに。私は、化け物なんかじゃないわ。

「——違う、私は悪魔だ！」

コンピュータを放り投げる。狙いはあいつの足下。……さすがに、死人は出したくないしね。

「ひ……ひiiiiiiii!!」

男は腰を抜き、地面にへたり込む。

それでも意識を保ってるのは、プロとしての意地かしらね。

「じゃ、眠りなさい。」

——決め技は、ドロップキック。これで、格納庫は制圧した。

「……って、制圧？陽動が目的だったのに、やり過ぎちゃったわね。」

こうなったら、自分で警報機でも押してやろうかしら……と考え、格納庫をつろつく。

そして——気付いた。

「……これ、IS用のハンガー？何で空っぽなのかしら……？」

side: コウヤ・ヤマシロ

(何で……。)

上手くいってはいはずだった。

ビーム発信機は強奪し、後は逃げるだけ。そのはずだった。
なのに――

(何で、こんなところにISがいるんだよ!)

――そう。俺の目の前には、見たことのないISが立ちふさがっていた。

青、白、赤の三色に彩られた、全身装甲のIS。

その両手にはアーマーシユナイダーが握られ、黄色いデュアルアイが、俺を射抜くように見ていた。

(どういうことだ……。新型は1機だけのはずだ……。!)

冷や汗が流れる。もはやここまで。

かつて味わったことのない、凄まじい危機感が、俺を押しつぶそうとしていた。

「観念しなさい、産業スパイ。盗んだものを返すなら、命まではとらないわ。」

――ッ! この声……。エイミーさん!?

なんてこった！てつきり、式典の方に行っと思ったのに……。

まずいことになった。

彼女は、N・G・Iでもトップクラスの実力を持っている。それが新型で出てくるとなると、その戦力は予想が出来ない……！

「だんまりかしら？なら……」

《警告！敵機、火器管制の起動を確認！》

「手足の5、6本は貰っていくわよ！！」

そんなにねえよ！というツツコミは呑み込み、俺はその場から飛びのく。

瞬間、敵機の頭部から銃弾が連射され、床に弾痕を刻みつけた。

「ふうん、やるわね。じゃ、次は格闘戦よ！」

敵はナイフを構え、脚のスラスターを吹かし、こちらに接近する。

——冗談じゃねえ！こんなところで、死ねるかよ！！

（8、閃光弾！）

《スタンバイ済みだ！》

右手の平に小型のグレネードが出現する。

ピンは既に抜かれていたそれを、俺は足下に転がし、全力で踏みつける！

カッ！！！！

強烈な閃光が巻き起こり、俺と敵機の視界を潰す。

《閃光弾、追加だ！》

さらにもう二つ。逃げる方向と、その逆に投げ捨て、一気に駆けだす！

逃げ切れるとは思えない。だからせめて、手に入れたコイツだけは引き渡さねえと……。

「——甘いわね。」

ブウン。

何も見えないはずの光の中。目のような二つの光が、確かに俺を見た……気がした。

全力で前に飛びのく。

ガキン！という金属音。

おそらくはアーマーシュナイダー。

……殺される！！

「逃げられると思ったの？このストライクから！」

敵が迫る。俺は逃げる。

でも、無理だ。逃げられるわけがない。

そもそも、生身でISの相手をするなど不可能だ。敵は機械で、こっちは普通とちよつと違うだけの人間。

《どうする？こうなったら、レッドフレームで……》
(だめだ！俺じゃ勝てねえ！)

まさに絶体絶命。ナイフを手に俺に迫るストライクが、死が、ゆっくりと近づき――

唐突に、その脚を止めた。

ビゴオオオオン――！

そして、響く爆音。

振りかえると、俺とストライクとの間には、大きな緑色の柱が出現していた。

「ッ！これは……ビーム！？どこから……」

「ココダ。」

そして穴から飛び出す、一機のIS……。そこにいたのは灰色の全身装甲で身を固めた、トサカを持つ鎧武者……。N・G・I-1017：ジンだった。

その両手に構えられたのは、ジン以上の大きさを持つ、長大なビーム砲であった。

「くっ……バルデユス……。」

「ニガシテモラウゾ。」

そう言うや否や、ジンはビーム砲を再び構え、ストライクに向けて発砲する。

施設の被害など考えない、強力無比な一撃。

対するストライクに回避の余地は無く、とっさに呼び出した赤いアンチ・ビーム・シールドで防御する。

「…ニゲロ！」

ジンから、機械的な音声が発せられる。

その声……音程こそ変えているけど、間違いない！母さんだ！

（…ありがとう、母さん！）

爆音を背後に聞きながら、俺はローラーブーツを展開して一気に逃げ出した……。

その後の話をしよう。

母さんは施設への無差別攻撃を行い、ストライクは防戦一方。

……完全に悪役の戦い方だね。一般人を人質にとるなんて、さ。

まあ、その混乱に乗じて俺は逃げ出し、母さんもジンを自爆させてから逃げたみたい。

…さすがにコアは盗まなかったよ？そんなことしたら、絶対に足が着くし。

そして騒ぎを聞きつけ、デュエルが戻ってきた頃には俺達の姿は既に無く。

空港が封鎖される前に、堂々と、国外への脱出に成功したのであった……。

こうして、モルゲンレーテはビーム技術を手に入れた。
生産されたビームライフルはMBFの装備として登録され、MBF
はASTRAYと名を改めることになる。

——そしてこの4カ月後。物語は大きく動き出すのであった……。

過去編その2 ビーム強奪事件（後書き）

これが、本編の四か月前の出来事。

この頃、まだデュエルとストライク以外のXナンバーは開発されて
なかったんだ……。

格納庫にあつた3機のジンのコアは、そのままXナンバーに転用。
そして完成し、テストが行われたのが一か月前。

そして……あの事件が起こった。

入院編第1話 あゝ、話し相手がほしい。(前書き)

本編連動企画、入院編です。

隔日更新になりますが、よろしく願います。

入院編第1話 あゝ、話し相手がほしい。

――先生。

――ん、何かね。

――俺の、左腕のことなんですが……

「あー、ヒマだ。」

現在、7月9日。福音とXナンバーを巡る事件のせいで大怪我を負い、あげく意識不明にまでなった俺は、本国に強制送還された。

ヘリと飛行機を乗り継ぎ、懐かしきオーストラリアへ帰って来たと思ったら即座に入院。

脳波やらCTやらをとられ、しばらく入院するようにとのお達しを受け、そのままベッドイン（卑猥な意味じゃないよ、念のため）。かくして俺は、退屈極まりない日常へと叩きこまれるのであった。まる。

《いいことじゃないか。私など、昨日きのう―昨日おやうは働きづめだったぞ。》

「それについては感謝してるぜ、8。おかげで、俺はこうして生きている。」

《そうか。ならば、態度で示せ。》

「ごめん。それ、無理。」

こんな風に、8とやりとりする以外に何もできない。

まったく、話し相手がコンピュータだけとは、なんて虚しい。

いつそのことソフィアでも呼ぶか？でも、あいつに心配かけたくないよな……。

部屋にはコンピュータだけ。でも、人と話がしたい。どうしようか

……。

………。

………。

………。

そつだ！チャットでもしてみよう！

> b e n i :さんが入室しました。

> b e n i :こんにちはー。

> k a n r a :こんにちは。

> y a m a d a :こんにちは。

> h i l l m a n :ケケケ。

> m a - b o :ふむ、よく来たな。ようこそ、教会へ。

> yamada:うう、別に教会じゃないけどねー。

> hillman:糞^{ファッキン}神父は放っておけ。

> beni:…あの、kanraさん。ここにいつもこんなに混沌^{カオス}としてるんですか？

> kanra:いやー、私も初めてなので、わかりません（汗

> yamada:いや、昨日もいましたよね。kanraさん。

> hillman:何カマトトぶってやがる、この糞^{ファッキン}カマ。

「……何この混沌^{カオス}。もう帰りたい。8、助けて。」
《仕方が無いな。》

> baileyさんが入室しました。

> 9ball: デストロイ

> ma-bo: ふむ、よく来たな。ようこそ、教会へ。

> beni: (汗)

> kanra: どうしました、beniさん？

> beni: いえ……別に。

> beni: 唐突ですが皆さん、ISについてどう思いますか？

> 9ball: 大きすぎる……。修正が必要だ。

> ma-bo: 科学が生んだ異端、だな。開発者は何を考えていたのやら……。

> yamada: うーん、多分何も考えてなかったんじゃないかな。

> hillman: テメーは黙れ糞^{ファッキン}神谷。

> kanra: それ、私じゃありませんよね？

> hillman: 使いりや強力なカードだ。だが、ありや男には使いねえ。

> kanra: ま、普通に生きてる分には、あっても無くても変わりませんよね。

> y a m a d a : それは同感。……でも、アレつけた女の子に殴られたら死んじゃうよね。

> y a m a d a : なんていうか、こう、出会いがしらに殴られるとか。

> k a n r a : まあまあ。いくら女尊男卑の世の中とは言っても、男だっていう理由だけで殴りつけてくる女の子なんていませんよ。

> y a m a d a : ……女尊男卑が原因じゃないんだよね^{それ}！。

「……俺、y a m a d aさんの正体に心当たりがあるんだけど。」
《あのファミレスのコックか。

……ところで紅也。こんなところでこんな問いを投げかけて、何のつもりだ？》

「いやあ、昨日、織斑先生に聞かれたんだよ。」

→

昨日——7月8日。

本国から呼び出しがかかった旨を織斑先生に伝えに行ったときのことだ。

「——と、言う訳で、昏睡の影響やレッドフレームのオーバーホールのため、一度本国に帰らせて頂きます。」

「そうか、分かった。」

——ああ、そうだ。山代。」

「はい、何でしょうか？」

「もし、お前のレッドフレームのようなものが世界中に流れたら、この世界はどうなると思う？」

その問いは、唐突だった。

確かに俺の——いや、モルゲンレーテの目的の一つはそれだ。

男でも使えるISの技術を確立し、利益を独占する。

だけど、その後のことなんて、考えもしなかった。

でも。

でも、世界は、きっと。

「何も変わらないんじゃないですかね？」

「ほう。それは、何故だ？」

「だって、ISが広がった今の世界でも、相変わらず政治家や国のトップには男が多いし。」

就職だって、それこそ軍や軍事企業以外は就職差別もないし。

何より——今は、平和ですから。兵器が増えた所で、それは世の中に影響を与えませんよ。

…… ああつ！でも、どっかの男性至上主義者がテロくらいは起こすかもしれませんが。戦争は起こらないんじゃないですかね。」

これは、半分嘘だ。

戦争は起こるかもしれない。でも、起こったら鎮圧するまでだ。

そうすれば、領土も獲得できるし周囲への牽制もできるし、一石二鳥……

——って、ダメだ。考え方が、完全に軍需産業複合体ロクスになってるよ、俺。

さて、そんな俺の返事に対して、織斑先生は腕を組んで、目を閉じたままだった。

もしかして……怒らせた？

とか思っていた俺に、なんでこんな返事が予想できたんだろうか？ いや、できない。

「それが、お前の答えか……」。

ふっ、難しく考えていただけのようだな、私は。
妙なことを聞いて悪かったな、山代。身体を大事にしろよ。」

ぽかーん。

その時の俺の状態は、まさにそんな感じだった……。

←

「……ってことがあったから、聞いてみたかったのさ。一般人の意見。」

《そうか。

……激しく相談相手を間違っている気がするが。》
「ん、なんでそう思うんだ？」

> hillman：ケケケ。弱みでも探って奴隷にしちまえ。

> yamada：そういう次元じゃないんだよね。そもそも、殴られるから会話が成立しないし。

> kanra：でも、情報を握るって言うのは有効な手段だと思いますよ。

> kanra：自分の誘導通りにコトが運ぶのって、面白いと思いませんか？

> mabou：フム、確かに。必死な連中の道化っぷり、操られていたと知ったときの絶望的な顔は……傑作だ。

> gball：管理者が「私」だと知ったときの「彼」も、そんな気持ちだったのでしょうか？

（……話題が激しくズレてる……。今日はもう無理だな。）

> yamada：mabouさん、本当に神父なんですか？

> b e n i : 何て言うか……「ド腐れ外道神父」？

> k a n r a : うわぁ、b e n i さん超毒舌！

> h i l l m a n : こいつは傑作だ！なぁ、ファッキン糞神父！

> m a - b o : ふっ……何でも言う方がいい。

> m a - b o : おっと、悩める子羊が来たようだ。私はここで失礼しよう。

> m a - b o さんが退室しました。

> h i l l m a n : ケケケ、逃げやがった。

> h i l l m a n さんがログアウトしました。

> k a n r a : どうやら、今日はこの辺でお開きみたいですね。

> 9 b a l l : ですねー。

> y a m a d a : じゃあ僕も。バイトの時間なので、これで……。

> b e n i : さよなら〜。

> y a m a d a さんが退室しました。

> b e n i : じゃ、私もこの辺で……。

> 9 b a l l : そうですね。私も。

> k a n r a : おやすみなさい。

> b e n i さんが退室しました。

> 9 b a i l l e さんが退室しました。

「ふう……。参考になったな、皆さんの意見。一般いっぽんの人は、ああ言う風に思ってるのか。」

《むしろ逸般いっばんの意見だったな。》

「にしても、結構時間が潰せたな。パソコンに熱中する引きこもりの気持ちが出来たぜ。

……きつと、今日集まってた連中もろくでもないヒマ人なのかな？」

《『ろくでもない』というところには全面的に同意だ。》

8の言うことに引っかけかりは感じたものの、あまり気にせず俺はパソコンを閉じた。

さて……。そろそろ葵に電話でもしようかな。

この時間なら、部活も終わって部屋にいるはずだ。

ああ、あとIS学園に連絡しないと。「しばらく帰れない」って。

ついでに、テストとか免除してくれねえかな。どうせ合格するのは分かってるんだし。

クラスの皆にもメッセージを送ろう。文面は……そうだな。
まあ、これから考えればいいか。

入院編第1話 あゝ、話し相手がほしい。(後書き)

なにこのカオスなチャット。

誰が誰だか分りますか？すぐバレるだろうなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0846v/>

ISV ~ RED&BLUE外伝 ~

2011年11月20日13時23分発行